和歌山大学教育学部附属小学校

らいぶ 創 つくりえいたー
LIVE CREATOR

NO.35
2007.6.1
研究広報誌

学びの質の高まりをめざして
~確かなみとりと支援により~

CONTENTS

●発刊にあたって「授業の達人･東井義雄『稲村の火』の実践に学ぶ」・・・・・ 1
●学校提案「本年度の研究について」・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2・3・4
●教科部紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5・6・7
●教育研究発表会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8

授業の達人・東井義雄「稲村の火」の実践に学ぶ

―子どもの「誤答」を見捨てない授業を―



和歌山大学教育学部附属小学校長・松浦善満

回想、達人教師の授業

「最近，授業の上手な達人が少なくなったのでは？」といった声をよく耳にする。このような声はかつて熱心に授業研究に取り組んだ 50 代前後の先生方に多い。私も共感するところがあり足元の附属小学校はどうだろうかと問いつつも，脳裏には何人かの達人・名人の面影が浮かぶのである。

私が教育学研究をめざした（1970 年）頃だった。関西方面を行脚した斎藤喜博が御影小学校の校庭での跳び箱の指導を行い，子どもを小太鼓のリズムに乗せてつぎつぎに跳ばしたことを，また『村を育てる学力』で注目された東井義雄（元八鹿小校長）が，羽曳野（大阪府）の小学校の講堂で黒山の参観者を前に国語の授業をしたことを想い出す。東井の授業を観た有賀（現・多治見地区教育研究会会長）は当時のことを，「夏休みにもかかわらず，子どもたちがぴんと張り詰め，集中し，たった 1 時間なのに読み方，話し方，考え方，聞き方の質が高まり手に取るように展開されました。授業を受けている子どもたちの幸せそうな顔を見ていて，自分の学級の子どもたちに『済まない』という気持ちがおこってきた。」と回想している。

「稲村の火」の授業実践に学ぶ

そこでかつて和歌山を何度も訪問した東井義雄の授業実践をみてみよう。

「授業は，授業からはじまっては授業にならない。」（「東井義雄著作集４」明治図書）との言葉は東井が残した名言だが，実際に彼は授業を進める前には必ず子どものノートに眼を通していた。

例えば「稲村の火」の授業記録にはつぎのような箇所がある。

「私は A という子どもが，作者の意図とはまったく逆の読み取り方をしていることを発見した。すなわち庄屋五兵衛が，自分の家の稲村のすべてに火を放ち終わり，たいまつを捨てて，じっと沖を見詰める場面を『五兵衛さんは，豊年でたくさんとれた稲をみんなもやしてしまって，おしいことをしたのだろう』と A は読んでいるのである。私は集団による学習の際，まずこの A の読解を発表させてみた。すると，B も C も D も E も，みんなが口々に『おかしいぞ』『おかしいぞ』とつぶやくのである。私はわざと『だって，せっかくとれた稲に，みんな火をつけてしまうんだもの五兵衛さんは惜しいことをしたと想うだろうな・・・。』といってやった。そこから B,C,D らとの問答が始まりやがて，大事な一文『もったいないが，これで村中のいのちが救えるのだ』に注目させ，B から『あった，五兵衛さんは，稲村に火をつける前にもったいないが，これで救えるのだ』といっていると発言する。『が』と『のだ』に迷いがない五兵衛の気持ちを読み取り発表させるのである。」（菅原稔編『現代国語教育論集成・東井義雄』明治図書 1991 年）

このように東井は子どもの「誤答」を使い，子ども相互が考え，新しい発見ができるように授業のタクト（Takt）を振っている。しかもまちがった A 君の回答の横に，白墨で小さな「○」を書いてやるのである。

斎藤喜博にも有名な「○○ちゃん式まちがい」の実践があるように，達人・名人といわれる教師の授業構成には，子どもの「誤答」を大事にする共通点がある。しかしながら，現在の学校現場ではこのような「誤答」を大事にして授業を組み立てている教師はどれほどいるだろうか。「学力向上」が叫ばれる中，また忙しさのあまり「誤答」を見捨てて「正解」を急ぐ，いわゆる問いと答えの「間」のないクイズのような授業が広がってはいないだろうか。

いま，子どもがより深い学びの世界に入り，学習の楽しさを実感するうえでも，「躓き」や「誤答」を大事にした授業実践が求められているように思う。

提案

平成 19 年度　研究主題

学びの質の高まりをめざして
～「つなぐ」「もどす」みとりと支援により～



志場　俊之

「昨年度研究実践の反省と課題」から

互いのまなざしが響き合う学習
～一人一人への確かなみとりと支援によって～

昨年度，左記の主題についての実践研究を行った結果，いくつかの成果を得ることができました。

子どもの様子の変化では，まず，聞くことの構えがよくなったことです。学級の中での仲間の発言に耳を傾けられるようになったことはもちろん，学年集会や全校集会でも落ち着いた雰囲気で前に立って話す人の言動に注目し，内容を聞き取ることができるようになってきています。

次に，子どもの姿に問い続けようとする構えができてきたことです。対象にかかわり，そこから出てきた問題に立ち向かっていこうとする粘り強さが見られるようになってきています。

研究面では，響き合いへと向かうための手立てとして，グループでの活動にたっぷりと時間をとることで集団での学びへの意欲化を図ることができるということや，比べさせることが子どもたちの意欲化を図る上でとても大切であることなどが明らかとなりました。子どもを見るという点においては，一人一人がどのように動いているのかを把握するために絶えず書かせることが教師のみとりを助けるものになることや，子ども一人一人へのみとりはペアやグループになることである程度見えてくることなどが共通理解できました。

また，これらの成果とともに課題も浮かび上がってきました。大きくまとめると，次の 3 点に集約されます。

・「学びの環境」作りを進めること
・一人一人の学びの過程を追うこと
・一人一人の学びを保障すること

上記のことを踏まえ，今年度の研究について，どの子どもも授業に参加し，どの子どもも課題に対して積極的にアプローチを繰り返し，そうして，自分の力で学び取ったという喜びを実感できる「学びの成立」をめざしていきます。そして，それが，より質の高い，深みのあるものになるよう，今年度の研究主題を「学びの質の高まりをめざして～『つなぐ』『もどす』みとりと支援により～」としました。

「学びの質」の高まりをめざして

「学び」とは，対象と対話し，他者と対話し，自分と対話することで成熟していく，対象を明らかにしていこうとする営みです。

学校の中で行われる「学び」は，とりわけ他者との対話が重要になってきます。わたしたちは，子どもが自らの意思で目の前にある対象とかかわり，対象のもつ意味を明らかにしていこうとする営みを願い，子どもの「学び」にかかわろうとしているのです。

「質」とは，「内容，中味，価値」を指します。また，ある対象を他の対象と区別する特質となっているものや，「どのような」という問いに対する事物のあり方です。

子どもの学びの質を高めるために，まず「学びの質」とはどのように高まっていくものなのかを捉えることから始めました。

そこでは，学びの中での他者の重要性が浮かび上がってきました。互いが，対象と対話し，自分と対話し，創り上げた思いや願い・考えを，他者との対話によって擦り合わせ，そしてまた何度も対象・自分との対話を繰り返すことで，学びの質が高まっていくからです。

また，それぞれの学びの質は，ただ自然に発展していくものではなく，そこには子どもの意欲・態度・能力といった個人の力量ももちろん必要ですが，教師のかかわりがどうしても必要になってきます。

だから，わたしたちは，「つなぐ」「もどす」みとりと支援により，子どもの学びの質を高めていこうとしているのです。そうして，それにより，集団としての高まりも見られると考えています。

提案

学びの質の高まりを支えるもの

子どもの学びによりそったカリキュラム作りカリキュラム作りでは，どのような子どもに育てたいのかという視点をもち，子どもにとって望ましい学びが展開されるよう，教材を吟味し選択しながら，子どもの発達段階や目的に応じて配列します。それが子どもの学びの実態に合わないと判断した場合には，教材を選択し直したり，配列し直したりして，子どもの学びによりそい，子どもの実態に合うものに作り変えていかなければなりません。

学びの環境作り子ども一人一人に居場所があることが大切です。子どもが力を出し切れるかどうかは，学級集団の中での人間関係が大きく関係しているからです。そのためには，子どもの学校生活での言動に対して，友達や教師がどのように受け入れ，返していくかというかかわり方が重要になります。また，そこで聞き合える関係を築くことも大切にします。そのためには，教師による子どもの思いや願い・考えへの完全な受容や，友達の思いや願い・考えを認め自分に生かすことによる学びの実感を得られるようにしなければなりません。自分の思いや願い・考えを相手に認めてもらえるという存在感を感じ取らせることも大切になってきます。双方向で満足する関係をもつからこそ，聞き合い，かかわり合おうとする関係も続いていくと考えています。

学びの質の高まりに必要なみとりと支援

対象と子どもをつなぐ「対象と子どもをつなぐ」みとりと支援は，子どもに対象を確かな目で見た思いや願い・考えをもたせるという点で大切です。

対象にかかわる時の意欲や態度，対象の捉え方，視点のもち方を把握しながら，これからの子どもの学びの方向を見定めるとともに，子どもの求め，レディネス，その子の能力や特性を判断し，対象との出会わせ方や単元構成を検討する必要があります。

また，対象へつながる糸口を目に見える形にすることで，より身近に対象を捉えられるようにします。そうして，仲間の視点や考えを意識させ，思いや願い・考えの再構築を促すのです。

子どもと子どもをつなぐ「子どもと子どもをつなぐ」みとりと支援は，互いの思いや願い・考えを擦り合わせるために大切です。その子の学びは何を求めようとしているのか，どの子の考えをもってくれば発展するのか，どの考えに反応するだろうか，などのみとりの視点をもち，その結果，何が生まれるのかを予測しながら，その子の学びの方向を見定めなければなりません。

友達の思いや願い・考えに目を向けてはじめて自分の思いや願い・考えと重ね合わせることができます。仲間と対話し，比べることができるのです。比べることができてはじめて，自分の思いや願い・考えとの共通点や相違点をもつことができるようになり，共通点に共感すると共に相違点にも目を向けるようになるでしょう。

教師は，共通点を整理し，相違点を明確にすることで，子どもたちが解決したい方向を明確に示すのです。そうして，違っていることを浮かび上がらせ，視点を絞った話し合いや活動へと導いていくのです。

学んだことと学ぶことをつなぐ「学んだことと学ぶことをつなぐ」みとりと支援は，子どもに学びの連続性を意識させるために必要です。

子ども一人一人の学びの過程をみとるために，その子の考えの変化を見極める必要があります。前の時間までに何を学びとっているのか，前の発言から変わっていることはないか，あるとすれば考えを変化させたものは何か，仲間の発言に反応するはずなのにできなかった，あるいはしなかったのは何が原因か，この時間に学ぶべきことは何か，この時間に学べそうなことは何か，学んだこととこれから学ぶことのつながりは子どもが見つけられそうかといったみとりの視点をもち，子どもたち自身で学びの質を高めていくために補助できることはないか，次につなげていくには何をもってきたらよいのかを考え，与えていかなければなりません。

学ぶことと社会の出来事をつなぐ「学ぶことと社会の出来事をつなぐ」みとりと支援は，何のために学んだのかを子どもに意識させ，学ぶことの意味を理解させるという点で大切になります。

学んだことやこれから学ぶことが社会の事象とどのような関係にあるのか，この学びが将来どのように生かされるのかといった，学ぶことの意味づけを子どもに理解させ，学ぶ意欲を呼び起こすのです。

この学びが社会の出来事のどんなこととかかわりがあるのかを位置づけることで，将来，ある社会の出来事に出会うとき，そこから学びを見つめる機会もできることでしょう。学校での学びと社会で出会う事象との 2 つの立場から対象を相互に捉えようとすることで，幅の広いものの見方や考え方のできる子どもが育つと考えています。

子どもの前と今とこれからをつなぐ子どもが学び続けていくために，子どもの前と今とこれからをつなぐみとりと支援をしなければなりません。それは，子どもの学びの変容を目に見える形で示してやることです。

最終的に子どもがどのような思いや願い・考えをもったかというだけでなく，はじめどのような思いや願い・考えをもっていた子どもが，どのような観点に触れ，今にいたっているのかまで知ることによって，その

子どもの変容を捉えることができます。

前の段階へもどす前の段階へもどすことの意味は，すべての子どもの学びの質を高めることにあります。

子どもの発言，子どもの反応，表情など，子どもの学びの状態を観察し，どこでつまずいているのかを見極め，つまずきのあったところまで場面を戻すことで，その子の学びを保障してやることが大切です。どの子にも学ぶ喜びを実感させる，どの子もジャンプできる学びを実現させるためです。子どもの学びの状態から，この課題を越えることが困難と分かった時には，潔く前の段階に戻して，もう一度みんながジャンプできるための準備を行うのです。

グループへもどすグループへ戻すことの意味は，少人数での活動を通して一人一人の参加を促し，集団での学びを活性化させることにあります。

グループでの活動により，多様な個と個の擦り合わせを組織し，新たな発言を引き出し，再び集団による，より質の高い学びへと向かっていくための手立てです。

個人にもどす個人にもどすことの意味は，対象に向き合わせ対話することで，もう一度思いや願い・考えを振り返らせることにあります。

しかし，そこから「いい考え」ばかりを求めるのではなく，対象との「いいかかわり」を求め，そこから子どもなりの視点で十分に見つめさせることを大事にしたいと考えています。それは，子どもが対象から幅広い考えをもてないのではなく，対象とのかかわりが浅いためであり，かかわる時間を保障し，子どもへの信頼と期待をもつことが大切です。

評価について

目標の一つに知識や技術，教科内容の習得が挙げられます。そこでは，それらを習得することができたかという一つの評価をすることができます。知識や技術，教科内容の習得は子どもに身に付けさせたいことがらだからです。

しかし，わたしたちが，子どもへの評価として大切にしたいのは，学びの過程における，問題を考え続けようとする力やそこで培われる創造的な思考力や豊かな表現力，的確な判断力といった主体的な能力についてです。対話を通して学びの質の高まりをめざしていく過程において，子どもたちの学びの質がどのように変容していくのかをみとりながら，合わせて一人一人の主体的な能力がどのように成長していったかをみとり，支援をしていく中で，みとりながら評価しているのです。

みとりは，すなわち子どもの学びに対する評価であり，支援は，その子どもの学びの質をより高いものに押し上げるための手立てともいえます。そうして，学びの質の変容を評価しているのです。

対象に出会い，どのような学びがあったのか，また，支援によりその子どもの学びの質がどのように高まったのか，その場面の子どものゆれや変容の様子を記録することがみとりであり，子どもの学びの質の高まりへの評価につながるのです。

わたしたちは，みとりと支援を大切にしながら，指導と評価の一体化を目指しているのです。

今年も夏季教科別研修会を開きます

7 月 26 日(木)

午前の部(9：30～12：00)
理科，生活・総合
午後の部(13：30～16：00)
社会，複式

7 月 27 日(金)

午前の部(9：30～12：00)
国語，英語，体育
午後の部(13：30～16：00)
算数，音楽

今年度も，左記の日程で夏季教科別研修会を開きます。

本校の各教科部の取り組みや考え方を少しでも紹介できればと考えています。たくさんの先生方に来ていただき，ご意見をお聞かせ願えれば幸いです。

なお，夏季教科別研修会での各教科部のテーマや内容については，次号に掲載させていただきます。

よろしくお願いします。

教科部　紹介

国語科　「対話力」を磨く

～発想力・論理力・表現力のある子どもを育てる～

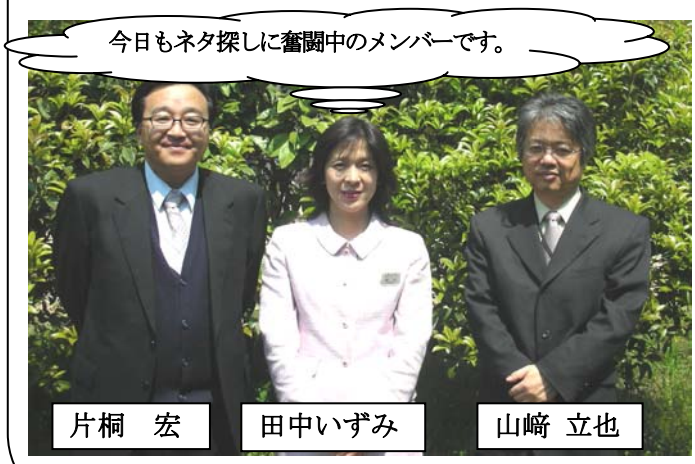


須佐　宏　　西村充司　　志場俊之

対象・他者・自己との3つの「対話力」を磨くことが手段であり，サブテーマの中に目標があるようにも見えるテーマですが，我々はその相互作用を大切にしています。

つまり，「対話力」を磨くことで，発想力・論理力・表現力を養っていきます。その力がより確かな「対話力」を生み，それがより確かで豊かな発想力・論理力・表現力を育てると考えます。とりわけ，自己内対話は，自身の「対話力」との対話であり，その子自身に発想力・論理力・表現力がしっかり根付く重要な活動であると位置付けています。

社会科　一人ひとりの学びの充実をめざして



社会科の全体学習につなげるための，ひとり学習の充実を大切にしたいと考えています。社会の問題を自分にかかわりのあるものとして受け止め，追究していくための学習をすすめていくことが大事だと考えています。全体学習の中で友達の考えを聞き，自分の思いを出し合う中での“学びの質の高まり”を目指しています。そんな願いをもちながら，子どもたちと楽しく，きびしく社会科学習を深めていきたいと思っています。がんばります！

算数科　子どもがつなげる算数科学習
～ 思考の「ずれ」を生かして ～



北原博男　土岐哲也　岡田明彦
梅本優子　宇田智津

算数科では，思考の「ずれ」を生かしながら「つなげる」という言葉をキーワードに取り組んでいます。子どもたちは、友だちの式や答え，絵や図を見ながら「よくにているが言い方や書き方が少しちがう。」「説明の絵や図がちがう。」「説明のしかたがわかりやすい。」など自分と同じところとちがうところに気づいていきます。学びの場では知識や認識のちがいによって，子どもたちの思考に「ずれ」があらわれます。一人ひとりの思いや考えを大切にするとともに，互いの考えを交流し，「ずれ」を意識しあうことで，子どもたちは学習をつなげていくでしょう。そして，共に学ぶ楽しさを味わうことができるでしょう。夏季研修会・研究会等で交流できればと思います。よろしくお願いします。

教科部　紹介

理科　自然の“文脈”をさぐる子どもを育てる理科学習
－自然に入り，科学をつくる－


中井章博　馬場敦義

私たちは，この“文脈”という言葉を自然の事物・現象の「筋道や背景」と定義して使用します。そして，“文脈”をさぐる学びを，**「“文脈”を読み解く学び」**と**「“文脈”をつくる学び」**という２区分を考えて研究を進めていきます。まず，**「“文脈”を読み解く学び」**とは，自然の中に入り，さまざまな事物・現象からある視点をもって対象の意味を獲得していく学びとします。自然の中には様々な情報が様々な状態で複雑に絡み合い，存在しています。その絡み合った“文脈”を解きほぐし，対象の意味を獲得していくのです。自分の身体全体を使って，五感をフルに使って対象を認識していくのです。

また，予想を立て，実験方法を考え，実験をして結果を得，考察する学習は，**「“文脈”をつくる学び」**であると考えます。なぜなら，実験方法を考える際には，子どもたち自身で“文脈”をつくり，予想を立てて考えているからです。そして，実験を行い，観察することによって，さらに，その現象の“文脈”を読み解くのです。

子どもたちは，自然の“文脈”をさぐることにより，より深く，より親密に自然を見つめるようになると考えています。そして，自然を大切にし，自然を愛する子どもを育てていきたいと考えています。

生活科　五感を通して，感じ，表現する生活科学習
～認識力の土台を育みながら～

今年度の生活科は，様々な“本物”にふれ，“本物”の体験を通して，低学年に必要な学びをすすめていきたいと考えています。
そのために，以下の４つの柱を設定しました。
① リアルな体験，学習と生活の結合
② 季節を感じる活動（季節の遊び・季節を食べる・栽培・飼育）
③ 人とかかわる活動
④ 世界を知ろう（世界の生活・人々・世界を食べる・ことば・遊び）
「ひと」「もの」「こと」との濃いかかわりをめざして，がんばります！！


上田　恵

音楽科　楽しく学ぶ基礎・基本

音楽科では，
《学び始め・学び合い・学び続ける》
子どもをめざします。
楽しく音楽を学ぶための基礎・基本は何なのか。
歌唱・器楽・作曲・鑑賞の
バランスがとれた活動の中で
明らかにしていきたい
と考えています。


江田 司　田辺 麻衣子

教科部　紹介

体育科　　新たな発見のある体育の学び
ー「できること」「わかること」「かかわること」を体育授業に位置づけるー

「からだのおかしさ」や「学力・体力の二極化」といった子どもたちの抱える現状に対して，どのような力を保障していくのかを考え，新たな体育授業のあり方を探っていきます。

そのために，本年度は「できる」「わかる」「かかわる」の３つのキーワードを体育授業に位置づけることに取り組みます。「どのようにすればできるようになるのか・上手になるのか」といった課題について仲間とかかわり合う学習を通して，できなかったことができたり以前と比べて上手になったりする喜びを味わえる体育授業を目指しています。そういった学習の中では，ともに学びあう仲間の上達も喜べるようになっていきます。このような「人とつながることによる達成感」が，楽しい学習にも結びつきます。



北端一喜　　坂本　桂

総合的な学習の時間　　学び続ける子を育てる
～"ほんまもん"体験を通した学びの足跡をつなげて～

子どもたちが自ら学び続けるためには，学ぶ楽しさを知ることが大切です。しかし，学んでいく過程において子どもたちは苦しみ，悩むこともあるでしょう。そこで，仲間とともに励まし合いながら前に立ちはだかる壁を乗り越えようと挑戦していきます。その壁を乗り越えたとき，達成感を得ることができます。この達成感を味わった子どもたちは，学ぶことの喜びを知り，次の学びへと続けることができます。

このような学びを実現するために，私たちは“ほんまもん”体験から学びを設計していきたいと考えています。



辻伸幸　藤原ゆうこ　神山求実　山中昭岳

複式教育部　　個と個のつながりを深め，主体的に学び合う複式教育
～発信･受信･再発信することを大切にして ～

「異学年」「少人数」という複式学級の特性を生かします。

そのためにも，少ない人数の中で共に学び生活する一人一人の個人と個人のつながりを重視していきたいと考えます。そして学年と学年，あるいは学級と学級といった，集団と集団のつながりも大事にしたいと考えます。

そこで，何より大切にしたいのは，互いを認め合い，かかわり合いを深めることです。「一人一人が自分の考えをもち，それを仲間に発信し，受信した者は，その良さを認めながらも，自分の考えを付け加えて再発信する。」このような繰り返しが個と個のつながりを深め，主体的に学び合う子どもたちを育てると考えます。私たちは，子どもたち一人一人が認め合い・かかわり合えるよう努めていきます。

また，昨年度に引き続き，これまでの国語・算数における同時間接指導の充実に加え，複式児童全員による縦割りでの学習活動や，理科・社会の学年別指導の研究・実践にも力を入れていきます。



教育研究発表会

第７回　複式授業研究会

個と個のつながりを深め，主体的に学び合う複式教育
～発信・受信・再発信することを大切にして～

日　時　　平成１９年　６月　２２日　（金）　　１０時４０分　～　１６時３０分

日　程

10:20	10:40	11:25	11:40	12:25	13:45	15:15	16:30
受付	研究授業Ⅰ	移動	研究授業Ⅱ	昼食	研究協議会（全体会・分科会）		

研究授業Ⅰ

１・２Ｆ＜国語＞：北川勝則
３・４Ｆ＜算数＞：市川哲哉
５・６Ｆ＜理科＞：辻本和孝

研究授業Ⅱ

複式学級全児童による縦割り活動
～表現活動～

全体会：複式提案
　　研究授業Ⅱについて
分科会：研究授業Ⅰについて
　　国・算・理の３分科会

共同研究開発校

◆海南市立　北野上小学校　（西川　泰司校長）
◆海南市立　下津小学校　（福田　佳史校長）
◆紀美野町立　野上小学校　（藤本　禎男校長）
◆有田川町立　小川小学校　（内田　敏夫校長）
◆湯浅町立　田村小学校　（山崎　雅博校長）
◆田辺市立　長野小学校　（南　照男校長）
◆和歌山市立　有功東小学校（小松　龍三校長）
◆和歌山市立　和佐小学校　（太田　晴雄校長）
◆和歌山市立　雑賀小学校　（有本　宗生校長）
◆和歌山市立　城北小学校　（津田　成章校長）
◆和歌山市立　宮北小学校　（伊藤　晴生校長）
◆和歌山市立　砂山小学校　（前田　忠　校長）
◆和歌山市立　新南小学校　（古川　博章校長）
◆和歌山市立　三田小学校　（武西　良和校長）
◆和歌山市立　雄湊小学校　（谷澤佐規子校長）

研究ＳＴＡＦＦ

校　長	松浦　善満	副校長	北原　博男	教　頭	梅本　優子
１　Ａ	田辺麻衣子	１　Ｂ	岡田　明彦	１　Ｃ	上田　恵
２　Ａ	宇田　智津	２　Ｂ	北端　一喜	２　Ｃ	西村　充司
３　Ａ	山﨑　立也	３　Ｂ	藤原ゆうこ	３　Ｃ	中井　章博
４　Ａ	坂本　桂	４　Ｂ	馬場　敦義	４　Ｃ	志場　俊之
５　Ａ	山中　昭岳	５　Ｂ	土岐　哲也	５　Ｃ	片桐　宏
６　Ａ	田中いずみ	６　Ｂ	辻　伸幸	６　Ｃ	須佐　宏
１・２Ｆ	北川　勝則	３・４Ｆ	市川　哲哉	５・６Ｆ	辻本　和孝

音楽専科　江田　司　　図工専科　西井　惠美子（赤井　泰子）　栄養教諭　神山　求実
養　護　上柏　薫　(濱地　由佳)
講　師　浦　聿　佐原　ちづよ　北野　史枝　足立　志穂　森　節子
大平　陽子　藤田　裕子　園部　勝章　野田　貞一　伊澤　亜紗
Ernie Wakefield Elliott　Hashimawari Steven Kei

From Editors

７年目の「らいぶ・創りえいたー」，表紙が新しくなりました。「生き生きと本物を創り出すひと」という意味を込めています。
ご意見・ご感想をお寄せ下されば幸いです。

和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137　和歌山市吹上１丁目４番１号
Tel　（０７３）４２２－６１０５
Fax　（０７３）４３６－６４７０
URL　http://www.aes.wakayama-u.ac.jp
E－mail　fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp